

## 第78回 経営協議会 議事要録

日 時 令和4年1月27日(木) 13時30分～14時45分

委 員 澤 和樹 学長【議長】、安良岡章夫 理事・副学長  
日比野克彦 美術学部長、杉本和寛 音楽学部長  
桐山孝司 大学院映像研究科長、熊倉純子 大学院国際芸術創造研究科長  
遠山敦子 委員、福井俊彦 委員、滝 久雄 委員、谷口維紹 委員  
冨田哲郎 委員、二宮雅也 委員、御立尚資 委員

陪 席 上田良一 監事

清水泰博 理事・副学長、麻生和子 理事、  
大場 武 理事・事務局長、岡本美津子 副学長、八反田弘 副学長  
佐野 靖 学長特命(社会連携担当)  
箭内道彦 学長特命(広報・ブランディング戦略担当)  
大森晋輔 附属図書館長、黒川廣子 大学美術館長  
河野文昭 演奏芸術センター長

欠席者 国谷裕子 理事、浜田健一郎 監事

### 議題

1. 第4期中期目標(原案)・中期計画(案)について  
議長から標記のことについて提案があり、審議の結果、原案どおり承認された。

### 報告及び連絡事項

1. 余剰金の翌事業年度への繰越しに係る承認について  
標記のことについて、荻原戦略企画課長から資料に基づき報告があった。
2. 令和2年度に係る業務の実績に関する評価結果について  
標記のことについて、荻原戦略企画課長から資料に基づき報告があった。
3. その他
  - ・本学の取組みについて
    - 澤学長から、芸術文化における本学の近況について報告があった。
      - ・2021/7～8 「SDGs×Arts」展及びオンライントークイベントを開催
      - ・2021/7～9 「藝大コレクション展2021」I期 雅楽特集を中心に、II期 東京美術学校の図案一大戦前の卒業制作を中心に@大学美術館
      - ・2021/10 「『共生社会』をつくるアートコミュニケーション共創拠点」が産学連携で始動
      - ・2021/10 「藝大アーツイン丸の内2021」が東京丸の内・丸ビルほかで開催
      - ・2022/1 寄贈記念展覧会「野見山暁治展 100年を超えて」及びギャラリーコンサートを開催(@東京藝術大学美術愛住館)
      - ・2022/1 東京2020復興モニュメント 岩手県、宮城県、福島県のお披露目式

### (受賞等)

- ・2021/9 ミュンヘン国際音楽コンクールで本学卒業生が優勝
- ・2021/10 「だれでもピアノ®」が「STI for SDGs」アワード 文部科学大臣賞を受賞
- ・2021/10 オタワ国際アニメーション映画祭で本学修了生が短編部門グランプリ受賞

### (要人来学実績他)

- ・2021/12 田中英之文部科学副大臣が本学を視察

### ※コロナ禍におけるご助言、ご提言等

○ 国の方策として、文化芸術立国が掲げられている。最近では SDGs や Society5.0 等により芸術・文化の力、世界における日本の立場の向上といった文脈でも語られる時代になっているため、この時代に唯一の国立総合芸術大学としての東京藝術大学の位置づけについて

て、根本的に遡って考え直す必要（例：東京藝術大学を他の国立大学法人との枠組みとは別扱いにしてもらう、設置者を文化庁にしてもらう等）があるのではないか。本学が他の国立大学法人と同様な括りで評価されることは、芸術はそぐわないといった側面が強く感じられるため、この点については文科省や文化庁に提案したらいかか。

○ 昨今、経済安全保障という言葉が聞かれるようになった。経済安全保障が大学人にとって無関係ではなく、科学技術がこれからどう使われ守られていくべきか、国益をどう担っていくかといったことで政府内では担当大臣までできている。芸術は経済安全保障とは違った側面があるが、世界へ発信している藝大の考え方をアピールできるいい機会ではないか。そういった時代の流れに応じた藝大の考え方を検討されたらどうか。

○ 1%フォーアーツを実現している韓国の事例を見ると、国が応援することで文化が世界のトップクラスに位置づけられている。日本では1%フォーアーツを実現されていないが、税金を使うことは国民の文化に対する意識（経済安全保障の項目にも入るような意識）にも繋がるのではないか。こういったことの中核となるのが藝大になるのではないか。

○ 藝大は非常に可能性の多い大学である。SDGsのコンセプトの中に文化・芸術が表現されていないことに問題を感じていたところ、「本学の近況」欄でのSDGs×ARTs展の資料にある「社会の根源にはアートがある」という表現・発信について藝大の素晴らしさを実感した。

○ 令和2年度の業務実績評価結果で藝大が全国立大学の中で一番であることで評価者は、藝大に一目も二目も置いているかと思われる。藝大は様々な分野において優れた人材が多くおり、実行するとなれば実現するだけの力のある方々である。能力のある将来のアーティストである学生を持ち、教員も優れた人材がいる大学は中々ない。これからも社会との関わりを先導していただき、芸術文化の重要性を発信していただきたい。

○ これからの藝大が持つ役割は、中期目標・中期計画の前文にあるとおりだと思われる。益々創造性や感性、芸術の力やアーティストの役割が大きくなり、芸術と異分野の融合や社会的課題の解決ということが求められるのではないか。具体的に何を行うかについては、個々の力を伸ばすことは大事だがその力を社会に発信する、又は大学外の主催者と共同で藝大の素晴らしい力を世間に発信していくことが大事である。企業もそういった事柄に応援する方向性になっている。NPO法人、地域の新しいスタートアップ企業や他の大学との連携等といった、余り政府に頼らず自由な主体との連携を通じて新しい藝大の姿をより作り出していきたい。

○ コロナ禍で苦しみながらも、一方でデジタル化の進展、ITを活用することでオンラインベースで円滑に日常業務が進んでいる。IT化が進んでいる今を景気としてポストコロナにおいてもデジタル化が一層進む世の中になると言われているが、同時にそれを行いながら人々は人の心と心の接触が日に日に希薄になってきていることを感じている。デジタル化の技術ばかりが先行し、人の心が忘れられる世の中になるのは将来的には非常に問題ではないか。芸術や文化は、元々は悩む人・喜ぶの心の奥底から湧き出でたものを美しく表現したものであり、人の心と心を高い次元で結びつけていくことに本質があり、藝大も言葉での説明ではなく、今後の活動を通じて改めて新しい姿で人の心と心を結ぶ実績をつけていただくことで、IT化の中でも豊かな心をもって暮らせるようになるのではないか。藝大はこの両立化を担う非常に重要な役割を持っていると思う。

○ 経済安全保障という話題があったが、今一度人間の安全保障を同時に重要視しなければならぬのではないか。新しい資本主義、成長と分配が言われているが、ここでいう成長は旧来のGDPの指標を中心とした経済成長となってしまうのではないか。それも大事だが、加えて文化・芸術、自然資本等の社会的共通資本の拡充・充実・発展がもう一つの人間の社会の成長であるということ、成長の定義を経済と人間社会の根幹の成長の2つ併せて考えることが必要ではないか。そういった意味では価値観を変える必要があるのではないか。

○ リカレント教育について、社会人をどう教育するかが大学に求められるようになってきている。一般大学ではスキルをもう一度新しいものに書き換える講義を行っているが、スキルを蓄積された上で入学する藝大にはそぐわないと思っており、リカレント教育というよりも社会人がアートに対して学び直したり触れるという機会を作る方法を藝大はどういうやり方で行うのかといった視点に戻られた方がいいのではないか。地域も含めて色々な形で芸術活動を行っている（そこの地域の社会人がアートというものを深く触れる中でうまく学び感じることができている機会を現実に実施している）が、それを束ね直してリカレント的（社会人にとっての芸術は何なのか）なことを伝えて、一緒に学んでいくことをする必要があるのでないか。社会全体のアートや感性について、それが人生・社会を豊かにし、結果的に経済にも繋がるといった流れで藝大らしいリカレント教育を作っていたらよいのではないか。

○ グローバル化も推進され、世界トップクラスの教育機関も含めて交流協定等されているが、日本の文化芸術の価値を高めていくということも藝大は担っているとすると、大きな意味でグローバルの文脈の中でネットワークと批評文化（国際比較の中で日本独自のものであるとしたらどのようなものか、日本と諸外国が交流しながらどんな新しい文化芸術を生んできたのか等）を強めていくことが重要である。日本の芸術文化がきちんと評価されるような軸を藝大側で作る、その上でグローバル化を作るということも大事ではないか。